



# 性とジェンダーをどうとらえるか

## 人類文化における普遍性と特殊性の一事例研究

國弘 暁子 (COE研究員・PD) KUNIHIRO Akiko

儀礼を通じて男性が女神の帰依者となるインドの「ヒジュラ」は、従来しばしば性とジェンダーの二元論を超えた「第三のジェンダー」として捉えられてきた。私は、これまでの論文や研究発表において、ヒジュラを「第三のジェンダー」と見ることに異議を唱えてきた [ 國弘 2005; 2006 ]。その理由は、男女の性の営みにより親族を持続させようとする人々の願いを叶える役割をヒジュラは担うからであり、人類文化に普遍的とみなされる二元論を覆す「第三のジェンダー」とはいえないからだ。インドの地域社会に生きる人々は、親族の系譜を持続させることを重視する。そのため、結婚適齢期を過ぎた男女を抱える親族、そして子のできない若夫婦の親族は、みな女神の力にすがろうと女神寺院を訪れる。女神寺院で祈願を終えた者は、そこで遭遇するヒジュラからも女神の恩寵を受ける。また、ヒジュラも子の生まれた家や結婚式場に出向き、人生の門出に女神の恩寵を受ける役割を担う。つまり、ヒジュラは、自ら男性として担うべき義務を放棄し、女性のような装いをし、しかし女性とはならず女神に帰依する者であり、男性と女性との性の営みによって可能になる親族の持続を祝福する立場にある。このようなヒジュラが存在意義に焦点を合わせて研究することは、「第三のジェンダー」の追究に向うのではなく、かえって人類文化における性やジェンダーにおける二元論の普遍性を浮き彫りにすることに貢献するのではないだろうか。

インド社会でも重視される親族の持続とは、川田順造の言葉を借りれば、『己』とその拡大された『同類』の「パーペチュエーション」 [ 川田 2001: 12 ] と見ることができる。「己」と「同類」のパーペチュエーション = 永続化とは、「己」とその拡大された「同類」を、少しでも長く存続させようとする志向であり、「同類」の持続は生物的性差がもたらす生殖によって実現される。この永続化の志向は人類文化に普遍的なものであるが、それを実現するプロセスや、その捉え方や表現は、文化による差異が著しく、特殊性を帯びる。同様に、永続化に資する

ことのないヒジュラのような人々の捉え方も、文化による特殊性を帯びることとなる。この永続化における普遍性と特殊性を同時に問題にするところに、私はインドのヒジュラとブラジルのトラベスチの比較研究の原初的な意義を見出し得ると考えている。昨年11月に神奈川大学と交流提携を結ぶブラジル・サンパウロ大学日本文化研究所に赴き、ブラジルのトラベスチ Travesti に関する調査の足掛かりを得ようとしたのもこのためであった。

サンパウロ大学日本文化研究所のスタッフは、当然のことながらトラベスチに関する調査とは縁遠い人々である。彼らは私の研究テーマをはじめは快く受け入れてくれなかったが、その理由として挙げたのは、トラベスチとの接触を試みる調査は非常に危険であり、そこに同行できる教員や学生がいないということであった。

現地の人々から危険視されるトラベスチとは、transvestir つまり、「装いにおいて男女の境界を超える」という動詞の派生語であることから明らかなように、女性のように装う男性である。その多くが、夜の街路上で男性客を見つける売春業に従事する。なかにはメディアで活躍するほどの知名度を獲得したホベルタ・クロゼ Roberta Close [ Rito 1998 ] のようなトラベスチもいるが、それは稀なケースと思われる。トラベスチは単なる異性装者ではなく、女性の名前、女性のような服装、髪型、化粧、言語を取り入れ、女性ホルモンの摂取やシリコンの注入によって女性的な身体特徴を獲得する。しかし、女性としての自己認識を持つことはなく、男性の性欲の対象となるように自己を作り上げる同性愛者とされる [ KULICK 1998: 5-6 ]。トラベスチは去勢しないため、女性と性関係を持つことも可能である。その場合は女性同性愛のような関係であるとも言われる [ DENIZART 1997: 170 ]

私の受入教員となった文化人類学者の森幸一教授は、トラベスチに関する短期調査に対して全面的に協力をしてくださり、トラベスチに関連する研究に従事する社会学者やゲイパレード協会への聞き取り調査を準備してくださった。ゲイパレード協会スタッフとのインタビュー



写真1

写真1：生後10日目の赤子を抱き上げるヒジユラ



写真2

写真2：女神寺院で女神の恩寵を与えるヒジユラ

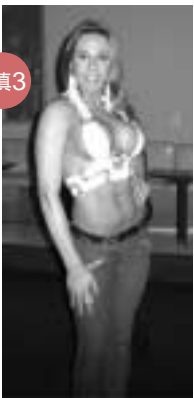


写真3

写真3：ダンスクラブのショーに出演しているトラベスチ



写真4

写真4：同性愛の男女が集まるダンスクラブにて

ルという異性装がもてはやされる祝祭行事とトラベスチとを結びつける見方もあり、ブラジルの基層文化におけるトラベスチ現象の根深さを垣間見ることができる。それが現実にすべてのトラベスチにあてはまるかは別問題であるが。

このように、ブラジル社会ではトラベスチを排除しながら、別の状況では受け入れるという二面性が見られる。この二面性の検討を通じて、ブラジルにおける「男性」と「女性」の概念を問い直し、さらには非日常性という面が強調されがちなカーニバルの本質に異なる角度から光を当てることができるのではないかと考える。

特殊な現象に見えるブラジルのトラベスチであるが、それを文化的影響関係にはないインドのヒジユラと比較することにより、「同類」の永続化に貢献することのない人々の捉え方、さらには、ジェンダー／親族／生殖という人類文化における根源的な側面を逆照射することはできないだろうかと考えている。研究方法において、それは「断絶における比較」[川田2004:4]である。それと同時に、ヒジユラとトラベスチは、現代のメディアの影響下にあるという点で「連続のなかの比較」[川田2004:4]という視点も必要である。インドのヒジユラ、ブラジルのトラベスチ、そして、そこに日本の男色文化や性同一性障害という現代医療の問題をも加えて比較検討することができれば、我々日本人にとってより身近な問題として、人類文化における性とジェンダーをめぐる普遍性と特殊性のあり方を考えることに資するのではないだろうか。

二週間という短い期間ではあったが、地元の日系新聞社の人脈のおかげで、実際にトラベスチが夜の街路上で売春相手を探す現場を見に行くことができ、また同性愛の世界が凝縮されたダンスクラブの状況を見ることもできた。帰国直前に、日本文化研究所で調査の報告を行った。研究所スタッフは、私の調査に懸念を抱いていたが、今度は逆に私を興味の対象として質問攻めにした。それは、彼らにとって全く別の世界に生きる存在であったトラベスチが、私を通じて、身近な存在として感じられるようになったからではないだろうか。研究所長からは、今日のブラジル社会では同性愛研究への関心が高まりつつあり、トラベスチ研究は時宜を得ているのではないかという、励ましの言葉をいただいた。

では、ブラジルの同性愛の世界に生きる人々から話を聞くことができ、参考になった。とりわけ興味深かったのは、同性愛者という大きな枠組みのうちに、ゲイやレズビアン、そしてトラベスチや両性具有者も含まれるということである。

ブラジルの同性愛者に含まれる人々の中でも、特にトラベスチは差別の対象となっている。トラベスチの多くは、家族からも社会からも追放された人々であり、惨めな人生を歩む運命にあると見なされている。このようなトラベスチに対する差別意識の問題は、ブラジルの社会学者たちが「傷つき易さ」をトラベスチ研究で重視していることから明らかであろう。その一方で、カーニバ

【参考文献】

- DENIZART, Hugo, 1997. *Engenharia Erótica Travestis no Rio De Janeiro*, Rio De Janeiro: Jorge Zahar Editor.
- 川田順造 2001「性 自己と他者を分け、結ぶもの」川田(編)『近親性交とそのタブー』藤原書店、pp.9-30.  
2004『人類学的認識論のために』岩波書店  
2005「比較民俗学のために」『比較民俗研究』20号pp.1-4.  
2006「文化人類学とは何か」『文化人類学』71-3、pp.311-346.
- KULICK, Don, 1998. *Travesti Sex Gender and Culture among Brazilian Transgendered Prostitutes*, Chicago & London: The University of Chicago Press
- 國弘暁子 2005「ヒジュラ:ジェンダーと宗教の境界域」お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』8:31-54  
2006『ヒンドゥー女神帰依者としてのヒジュラが多義性 インド、グジャラートにおけるヒジュラの存立構造に関する文化人類学的考察』お茶の水女子大学大学院学位申請論文(『ヒンドゥー女神の帰依者ヒジュラ:聖俗と性の境界をめぐる人類学的研究』という題で風響社より近刊予定)
- NANDA, Serena, 1999 (1990) *Neither Man nor Woman the Hijras of India*: Wadsworth Publishing Co.  
( 蔦森樹、カマル=シン共訳、『ヒジュラ 男でもなく、女でもなく』青土社、1999)
- RITO, Lucia, 1998. *Muinto Prazer, Roberta Close*, São Paulo: Editora Rosa Dos Tempos.

コラム

Column

瀬戸内の小さな島で

香月 洋一郎 ( 神奈川県立日本常民文化研究所 教授 / 事業推進担当者 ) KATSUKI Yoichiro

今から二十年ほど前、瀬戸内西部の小さな島をよく歩いていた。その島は面積が一平方キロほど、集落は二つというほんとうに小さな島だったが、瀬戸内海有数の一本釣漁の根拠地として個性的な歴史をもっていた。

その当時、この島が二十年後どうなっているのか、コンピューターで簡単なシミュレーションをしてみたことがある。二十年後は負債とお年寄りしか残らない。コンピューターの画面にはそう要約するしかない数字があらわれていた。実はその当時も、その島が属する自治体は少なからぬ負債を抱え、そしてお年寄りの多い島だったのである。

そして最近、ほぼ二十年ぶりにその島を歩いた。やはり「負債とお年寄りの島」だった。けれども二十年ほど前のお年寄りはほとんど鬼籍に入られていた。かつてのお年寄りの御息息にあたる世代の方が定年後にUターンされて島にもどられ、かつて幼少時をすごした家に住んでおられたのである。その間、何が変わったのか。走り書きにだか略記してみると、新しいハコモノが増え、道の舗装がすんだ。波止がきれいになった。山が荒れた。という点があげられる。この程度の変化は通りすがりの私にもすぐに見てとることができた。

についての問題はいろいろとマスコミでとりあげられていることであるから、ここでは省く。は波止に積み上げられていた様々な漁具がきれいになくなり、波止がすっきりとして歩きやすくなっていくことを示す。かつて瀬戸内の漁師は「七漁具(ななもとで)七漁師」と言われるほど多種多様な漁具を揃えていた。地形や海流が複雑であり、さらに好市場も多いことからこまやかな形でそれらの動きに対応せざるを得ず、専業の漁師であるほど新漁具、漁法の導入に敏感であり貧欲だった。そして一旦使われなくなった漁具でも、置き場がある限り山積みになっていた。いつまたそれらが利用できるようになるかもしれないのだから。そのため瀬戸内の波止は多様な漁具で雑然としていたものである。三十年間は使っていないタコツボの山や、五年前まで使っていた底引き網のさびた金具の脇を抜けて、波止を歩くことになる。それらがきれいに処分された波止になっていた。波止の雑然さが消え、なにか静かな空間となっていた。これはひと世代前の潜在的な漁への姿勢が一掃されたことをも語っている。伝承そのものではなく、その基盤となる意志や意欲がきれいに消えた。けれども現在のお年寄りたちも、折を見ては地先に小船を出し、一本釣りを楽しんでおられる。そこだけを切り取ると、そう大きな変化はないとも言える。

についても同様である。山が荒れ始めると、山が何の稼ぎになるというわけではなくとも鉋や鎌を持って山そうじに出かける。そんな姿勢を持った世代がいる限りは、山が稼ぎの場でもなくなって一挙に荒れることはない。集落に遠い山から少しずつ荒れていく。そんな姿勢が薄い世代になると、山の荒れ方は一挙に、そして明快にあらわれる。

人の意思の環境への届き方は、そこに違いとなっははっきりとあらわれてくる。たとえ都会人が言う「自然」の中で人が暮らしている環境においても。家とハコモノと道、そこに意思が強くおさまり、山と海への目配り、心配りがみられる薄くなっているありさまを見ると、自然に囲まれたこの地においても、そこに人はある意味で「都市」の凝縮された断片を持ちこみ、それを生活のなかのなにかと置きかえることで問題を処してきたのだろうか、処していくのだろうか。そんな思いにも至る。